

# 桂川・由良川源流

【かつらがわ・ゆらがわけんりゅう】



域の89%が山地、平地は福知山盆地に集中する。若狭・丹波・近江の三国を見下ろせる三国岳は、由良川流域最高地点で、北隣りは福井県嶺南地方で最大流域規模の南川(460km<sup>2</sup>)流域となる。

桂川は京都市右京区・左京区、南丹市の日吉ダムを経て、亀岡市から京都市西部・南部を流れて淀川に至る。亀岡と京都両盆地間の保津峡出口の嵐山の少し手前で、小野郷・中川の北山杉山麓や高雄を流れる清滝川が流入する。

丹波高地は地質学的には隆起準平原とされ、古生層の中に花崗岩が侵入した形態である。日本海側と瀬戸内海側の分水界を成す由良川と桂川源流域は、

## 1. 地理・地形

京都府最高峰の皆子山(標高972m)と2,3番目の峰床山(970m)や三国岳(959m)が、丹波と近江の国境で南から北へ順に並んだ西麓が桂川(流域面積1,100km<sup>2</sup>)と由良川(1,880km<sup>2</sup>)、東麓が安曇川(311km<sup>2</sup>)の源流域である。

三河川の水源は丹波高地東端に位置し、由良川は日本海へ、桂川は淀川を経て瀬戸内海へ、安曇川は琵琶湖を経て淀川となる。由良川・桂川両源流域の山々は近畿地方の登山やトレッキング愛好家に人気の京都北山の東北端である。

由良川は南丹市の大野ダムを経て、京丹波町・綾部市・福知山市を抜けて宮津市と舞鶴市の境界をなし、若狭湾に出る。由良川は流域面積が京都府の37%を占める北部最大の河川で、流

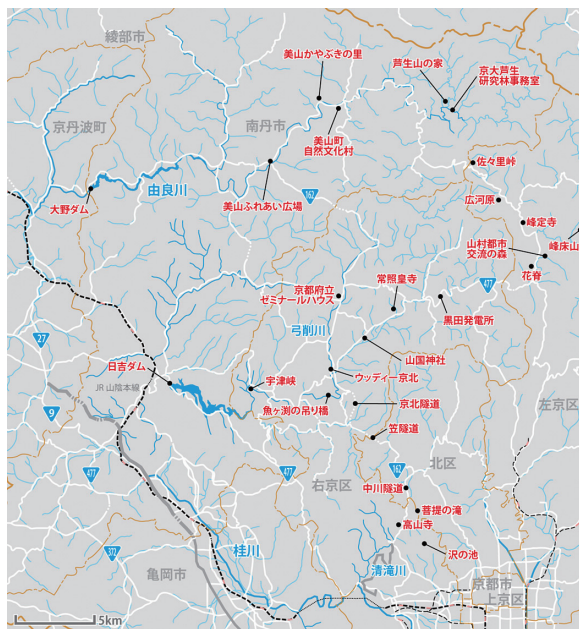


写真1 美山かやぶきの里

それぞれ日本海式気候と瀬戸内式気候の境界の山沿い地域で、北山しぐれに代表されるように、京都府内では年降水量の多い多雪地域でもある。

## 2. 歴史・文化

【由良川美山上流部】

由良川源流域の南丹市美山の北村地区は、「美山かやぶきの里」として、今や、京都北山では高雄とともに観光バスの押し寄せる屈指の観光地となっている(写真1)。緑の杉山を背景に鎮座する茅葺民家の集落は、絵のような風景を醸し出している。その維持・保存上で大切な防火訓練の消防の放水風景は、よく写真で紹介されるほど美しく映える。

2013年正月前後に放映された日本郵便のバイクによる郵便配達風景のTVコマーシャルは、ここを日本の原風景に出会える人気スポットにした。

由良川上流域は、山紫水明は無論であるが、アマゴや鮎釣りで賑わい、潜没橋(沈下橋)を渡って左岸側に行けば、美山町自然文化村がある(写真2,3)。ここは、散策や山歩きの案内所として情報提供や地元の物産販売のほか、ログハウス風の宿泊施設等を備えている。

【由良川美山中・下流部】

国道162号で京都市右京区京北の弓削川上流から深見隧道を経て深見川を下った由良川との合流点が、源流域の芦生地区に至る府道38号の分岐点で、南丹市美山安掛の道の駅である(写真4)。

国道162号を小浜方面に向い、九鬼



写真2 沈下橋と由良川



写真3 由良川の魚道



写真4 道の駅「美山ふれあい広場」

ヶ坂から静原経由で府道12号を和知方向に行けば、大野ダムに至る。安掛から府道368号で宮脇や和泉を経ても府道12号で大野ダムに至る。その直前に京焼の祖と言われる野々村仁清生家や、1650年創建の記録が残る日本最古の農家で国の重要文化財の石田家住宅が解体修理・復元されている。

大野ダムは1943年に治水目的で着工され、戦争中の建設中断や建設反対運動等を経て、1961年に竣工した京都府管理の高さ61m、総貯水量2,855万m<sup>3</sup>の重力式コンクリートダムである(写真5)。ダム入口にはパネル展示やディスプレイ映像の見られるビジターセンターがあり、虹の湖とダム周辺は春の桜、秋



写真5 大野ダムと虹の湖



写真6  
展示された  
新聞報道

の紅葉が有名である。

大野ダムは、2004年10月20日の0423台風による大出水時に、由良川下流沿いの国道175号を走行中の貸切バスが大増水で立ち往生し、乗客37人がバスの屋根に避難して救助を待つTVや新聞のニュース報道で全国的に知られるようになった(写真6)。

美山での観測史上1位の日降水量196mmの豪雨による2つ山の洪水で、大野ダムは1,186m<sup>3</sup>/sのピーク流量の463m<sup>3</sup>/sを貯留し、723m<sup>3</sup>/sを放流した。一時的に貯留できる最高水位のサーチャージ水位まで2mに達した段階で、バスの立ち往生の情報が入り、「ただし書き操作」により、放流量を抑制したため、翌21日にバス乗客全員が無事救助された。

#### 【桂川右京区京北上流】

京都市に編入された旧京北町は、国道162号に笠隧道、中川隧道、京北隧道の順にトンネルが完成し、京都市街地へのアクセス時間が短縮し、今や車での通勤圏となった。歴史的にも、山国をはじめとする旧京北町は、平安朝以降の京への木材供給や朝廷の荘園として朝廷や寺院との関係が深く、桂川は筏流しの木材輸送路であった。

桂川は亀岡と嵐山間は保津川、亀岡市以北の上流域は大堰川と呼ぶ。大堰川最上流部の広河原は堰源地区と称し、かつては旧京北町に属したが、1957年京都市左京区に編入された。木材や、山麓の雑木で焼いた木炭を出荷した林



写真7 山村都市交流の森



写真8 峰定寺仁王門

業の里であった。川沿いの低地には水田と茅葺の民家が残し、炭焼き窯跡も見られる。山深い積雪の多い地域ゆえ、現在も過疎化が進んでいる。出町柳から広河原まで京都バスの便があり、終点のバス停近くの水田脇の大堰川左岸側川縁には、桂川管理起点標が立つ。

広河原から京都広河原スキー場を越える府道38号の九十九折の佐々里峠の坂道は、山仕事やかなりハードなトレッキング客の車両通過だけのため、土休日は自転車競技者の訓練フィールドになっていて、汗を浮かべ苦しい顔でこぎ上がってくる若者たちとの出会いも多い。瀬戸内海と日本海の分水嶺となっている佐々里峠を下ると、かつての佐々里スキー場跡入口に至る。現在は、ササリナナチュラルランドの看板が上がり、キャンプ場となっている。さらに進めば、南丹市の芦生に行ける。

広河原に300年以上も残る伝統行事の松上げは、江戸時代から8月24日の地藏盆の夜に行われ、精霊送りや火難厄除・豊作祈願の愛宕信仰の神事である。河原や畦道の松場に差し込んだ約

千本の松明(地松)に火をつけ、高さ約20mの燈籠木の先端の大笠に松明を投げ上げて火をつける行事である。花脊八柵地区の山村都市交流の森の河原でも、8月15日に同様の松上げ行事が行われる。

急坂でカーブの多い鞍馬街道の花脊峠を越える京都からのバス道は、大堰川支川別所川沿いを北に進み、花脊の合流点から大堰川を北上することになる。山国・黒田地区からと、鞍馬・花脊峠越えの道が会う大布施の先の八柵地区には、(公財)京都市森林文化協会の管理する山村都市交流の森があり、宿泊施設の翠峰荘も併設されている(写真7)。ここから、峰床山や八丁湿原などに行ける。

現在は、国道162号で高雄・周山から国道477号で黒田・花脊を経て広河原に至る方が、道路状況が良い。

林業の里の広河原の原地から支川寺谷川沿いに東上すれば大悲山峰定寺に至る(写真8)。山麓の山門から山腹まで登る峰定寺は1154年創建の修験道系の山岳寺院で、本堂、仁王門、千手観



世音菩薩坐像の重要文化財がある。

花脊から山国方面に向った下流側の黒田地区には、関西電力の古くからの水力発電所が改築されて存在する(写真9)。

山国の大野地区には室町時代の北朝方の2つの天皇陵と1つの天皇分骨所の常照皇寺がある(写真10)。室町時代北

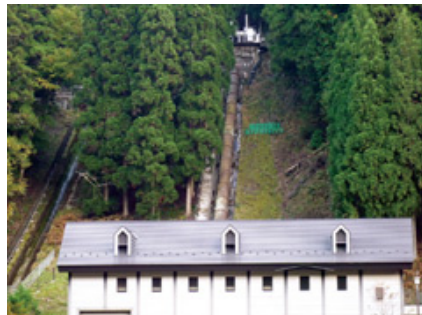


写真9 黒田発電所と水路



写真10 常照皇寺山門



写真11 常照皇寺九重桜

朝初代の光厳上皇が無住の成就院を改めて開創され、勅使も迎える格式の高い臨濟宗寺院である。天然記念物の枝垂れ桜の御車返し・九重桜・左近の桜や紅葉が有名で、白洲正子の「かくれ里」にも紹介される(写真11)。

その少し下流には、京都の時代祭の先頭を歩く維新勤王隊(山国隊)を祀る山国神社と山国護国神社があり、10月中旬の祭礼には山国隊の鼓笛隊行列と神輿の巡行が行われる(写真12)。

さらに下流で支川弓削川が合流する周山地区は、洪水時に両川の合流に伴う背水による浸水に悩まされてきた。その名の如く四周が山で、三日天下の明智光秀が造ろうとした山城の周山城址があり、現在は道の駅ウッディ京北があって、地元の物産や観光情報が得られる。なお、周山は交通の分岐点で、周山の下流の右岸側の細めの道を下れば、魚ヶ淵の吊り橋に行ける(写真13)。

周山から国道477号で馬ヶ背峠越えをすれば、大堰川下流の宇津峡に行ける。細野川合流点付近の河原や、大堰川下流左岸側の宇津峡公園はキャンプ



写真12 山国神社



写真13 魚ヶ淵の吊り橋

場や釣り客でにぎわう場所である。周山で京都からの国道161号をそのまま直進して、京都府ゼミナールハウスのある弓削地区を経て、分水嶺の深見隧道を越えれば、由良川の南丹市平屋地区に至り、国道477号を東方向の大堰川上流に向えば山国地区に行ける。

#### 【日吉ダムと保津川】

京都市右京区京北と南丹市日吉町の間の桂川宇津峡下流端に、1997年に日吉ダムが竣工し、天若湖が誕生した(写真14)。その上流端に従来から存在した関西電力の世木ダムは、ゲートを撤去して、水力発電用水取水用の堰となり、日吉ダムの一種のプレダムの形となった(写真15)。

堰堤を見上げる景観は、日本建築学会賞を受け、ふるさと切手にもなった。淀川水系の治水対策と水道・環境維持用水確保が目的で、洪水調節効果のほか、保津川下りの営業日数増加をもたらしたが、濁水の長期滞留も伴った。1318台風による既往最大の出水や0423台風の大出水でのピーク流量カットで下流側の被害軽減に貢献した。それで

も、嵐山や久我地区では越水被害が生じるほどの洪水であった。天若湖左岸側にビジターセンターや京都府府民の森があり、ダムサイト直下のスプリング日吉とともに地域に開かれたダムとして存在価値を高めている。



写真14 日吉ダム堰堤



写真15 世木ダム



写真16 芦生研究林事務所

### 3. 自然・環境

京都北山の秘境と称される由良川流域は、芦生原生林で知られる。南丹市美山の芦生の里は、雪深い集落で早くから過疎が続いたが、芦生なめこ生産組合（現、有限会社芦生の里）が山菜加工と木材加工（芦生木工組合）でまち興しをし、廃村の危機を脱した経緯がある。今や、山菜の露やしめじの佃煮は京都市内のスーパーにも並ぶ。

#### [芦生原生林とダム計画]

1965年に京阪神の使用電力量の約6割超を供給することになる福井県内の原子力発電所の夜間余剰電力で、芦生演習林（現、芦生研究林）内の上部ダムに揚水し、昼間は福井県側の下部ダムに落とす発電計画が持ち上がった。建設反対運動でダム計画は中止となり、灰野以奥の共有林を借り上げていた京都大学が、原生林を含む貴重な学術研究フィールドとして管理している。

芦生研究林（4,200ha）の約半分は人手の加わらない天然林で、関西では奈良県南部の大台ヶ原と並ぶ原生林で知



写真17 由良川橋(トロッコ道)



写真18 沢ノ池

られる。研究林入口には三角屋根の山小屋風の「京都大学農学部附属フィールド科学教育研究センター森林ステーション芦生研究林事務所がある(写真16)。

ここからトロッコ道の由良川橋を渡って七瀬自然観察歩道や三国岳・三国峠方面に向うには、当事務所に事前の入山許可を得て、後日使用報告を提出するのが正式である。研究林事務所の手前には、バーベキューハウスも備えた芦生山の家の宿泊施設がある。ここは美山町自然文化村と同じ経営で、芦生ネイチャーガイドトレッキングとして、ガイド付きで研究林内を歩ける。

芦生演習林内七瀬観察道の旧トロッコ道を進むと、灰野集落跡に至る(写真17)。崖下の由良川の清流ではアマゴ釣りを見かけることがある。この川縁に由良川の管理起点標が立つ。この由良川管理起点と大堰川(桂川)の管理起点は佐々里峠を挟んで、直線距離でわずか4kmの近さである。

#### [沢の池と酸性雨の影響]

京都から桂川の源流域に向うアクセスの1つは、車やバスで、JRや京都市

営地下鉄二条駅や阪急電車大宮駅等から京都市北西部を経て、高雄・周山経由が所要時間や道路状況が良い。しかも、紅葉だけでなく青葉のもみじトンネルの高雄、北山杉の山々と中川の磨き丸太などが鑑賞できるコースでもある。とくに、高雄高山寺(JRバス・京都市営バス梅ノ尾バス停)直前で、清滝川白雲橋の手前左岸側から福ヶ谷川沿いの山道を登って、1時間弱で行ける沢ノ池と、その流出先の菩提川沿いの林道を下って、菩提の滝を経て菩提道バス停に出るハイキングコースはお薦めである。

沢ノ池は、最高標高540mの松や雑木の山中の凹地である(写真18)。最近少なくなった時代劇の京都市街に近いロケ地でもあった。しかし、ここは酸性湖沼として注目される池である。昔の灌漑用水池の役割を終えて、水位は制御されないために増減が少なく、池水は地底近くから少しずつ漏出する。時折、ハイキングやブルーギル釣りの客が現れるくらいで、人為汚染もなく藻類の現存量も大きくない。集水面積は0.31km<sup>2</sup>と小さく、流入河川はなく、降水水質の影響が現れやすい。1993年

から環境省の酸性物質の陸水影響モニタリング調査の対象で、pHやアルカリ度の低い湖沼の1つである。

京都市衛生公害研究所の長期的な継続観測によると、1960年頃から1980年代まではpHが低下傾向で、1990年代は5.5前後を保っていたが、2003年以降は少し上昇傾向にある(図1)。高山の岩質の窪地の池での降水の溜まり水とは違って、集水域が山林であり、2000年の三宅島噴火の影響かと思われるpH低下も観測されるほど、京都市内からの大気汚染影響を差し引いても、長距離輸送の影響を反映する酸性影響に敏感な池である。

(海老瀬潜一)

#### 参考文献

- 京都府大野ダムビジターセンター(2005)展示新聞記事。
- 白洲正子(1971)講談社文芸文庫 かくれ里, pp. 63-74, 講談社。
- 仲村 研(1994)中公文庫 山国隊, 250pp., 中央公論社。
- 水資源機構日吉ダム管理事務所, 日吉ダムリーフレット。
- 吉川俊一(2004)沢ノ池(京都市)のpH, アルカリ度, 各種イオン類の11年間の変動傾向について, 陸水学会誌, 65, 99-108。

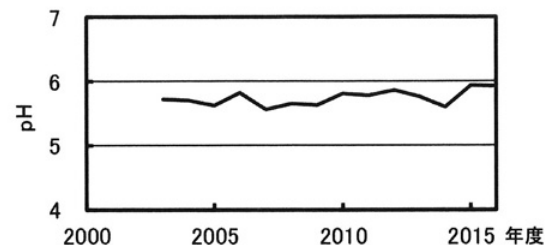


図1 沢ノ池のpH経年変化



# 保津川・桂川

【ほづがわ・かつらがわ】



## 1. 桂川の概要

桂川は宇治川、木津川とともに、淀川水系を構成する代表的な支流のひとつで、流域面積1,150km<sup>2</sup>、幹線流路延長114kmの1級河川である。桂川の名の由来は、下流部の桂の里（旧地名では葛野郡桂村）を通ることにより、古くは葛野川と呼ばれていた。

桂川（上・中流部は大堰川とも呼ばれる）には古くから筏流しがあり、上流部の京北から日吉、八木、亀岡を経て、京都の嵯峨嵐山まで、丹波材の出荷が盛んに行われた。園部から八木、亀岡にかけての中流部では、以前多くの農業用井堰があったが、現在そのいくつかは上桂川統合堰に統合されている。また、

江戸時代中期に角倉了以によって亀岡から嵐山の間（この部分は保津川と呼ばれる）が開削されたことによって、舟運が一層盛んとなり、現在では保津川下りとして観光客を集めている。

保津峡出口に位置する嵐山は風光明媚で知られるとともに、多くの歴史遺産が集中している。

桂川下流部にも多くの井堰があり、兩岸の田畑を潤してきたが、堰の落差のために魚類の遡上が妨げられ、その改良が望まれている。また、日吉ダムの建設によって洪水被害の頻度が減少したものの、なお、亀岡盆地や下流の京都市域においても氾濫の危険があり、引き堤や河床掘削等の治水事業が進行中である。



桂川の中下流域を貫く幹線道路は長い間国道9号線であったが、1988年に京都縦貫自動車の沓掛-千代川間が開通し、さらに1996年に千代川-丹波間、2013年に沓掛-大山崎間が開通して、大山崎から園部までわずか30分で行けるようになった。

## 2. 桂川中下流部の歴史と文化

〔中流部(大堰川)〕

桂川が南丹市日吉町を出て園部町を経て八木町に入ったところに、関西電力の新庄発電所がある。この発電所は、上流の世木ダム（1951年完成）から取水している出力7,000kwの発電所である。そのすぐ下流で桂川中流部最大の支川である園部川が合流する。園部川の上流には、国の名勝地に指定されているり溪がある。

桂川が亀岡市に入る直前には1935年当時の架設技術の粋を集めたトラス橋の大堰橋が架かり、そこに大堰川緑地公園がある(写真1)。

そのすぐ下流、亀岡市に入ったところに上桂川統合堰がある(写真2)。この堰は室町時代に設置された寅天堰は



写真1 大堰橋



写真2 上桂川統合堰



写真3 出雲大神宮

じめとする7つの堰を1963年に統合して作られたものである。

亀岡市千代川の月読橋の東方に、徒然草にも記され、大国主命を祭った「元出雲」と呼ばれる出雲大神宮があり、そこに「真名井の水」が湧き出している(写真3)。また、千代川の西には、西国21番札所の穴太寺がある。この寺には撫でてお願いをすると霊験があるといわれる布団を掛けた涅槃像がある。また「悪病退散・癌封治」で名高い稗田野神社には長寿の滝から御幸水が噴出している。JR亀岡駅のすぐ南側に明智光秀が築城した亀山城があり、外堀の南郷池から望む風景は旧城の面影を残している(写真4)。

## 〔保津峡〕

JR山陰本線亀岡駅の北に、京都スタジアムがあり、その端に保津川下りの乗船場がある(写真5)。「川下り」というのは、保津川の水流を利用して下流にある京都・大阪に物資を輸送する水運で始まった。この歴史は古く、平安京以前の長岡京に都があった頃から行なわれ、その後天龍寺をはじめ、大坂城築城、伏見城造営と、保津川の水運を利用して、筏によって遠く上流の丹波から木材などの資材が輸送された。

1606(慶長11)年、川大名といわれた京都の豪商角倉了以によって水路が開かれてからは、木材・米・麦・薪炭などが高瀬舟で輸送されるようになった。丹波の豊富で質のよい木材・穀類・薪炭は、戦後の1948年頃まで水運によって京都に運ばれていたが、山陰線の開通(1899年)と戦後のトラック輸送の発達によって筏と荷船による水運利用は次第に姿を消していった。

保津峡の自然美は四季を通じてすばらしく、巨岩をはじめ、周囲の山々と、しぶきをあげて落流する水、神秘をた



写真4 南郷池

たえた鏡のような淵など、変化に富んだ景観は、まさに人の目をとらえて離さない。そこで、1895年頃から、遊船として観光客を乗せた川下りが始まり、亀岡から嵯峨まで16kmに及ぶ保津川下りは、今年年間を通じて約30万人の観光客が訪れている。

亀岡盆地から保津峡にさしかかる手前に内膳堤の名残が見られる。内膳堤というのは、江戸時代の亀山藩の領主であった岡部内膳守長盛の名前に因んで名付けられたもので、上内膳と下内膳がある。その上に、保津川の氏神で火祭りで名高い請田神社がある。

保津川下りの中ほどで亀岡市から京都市に入るところには、JR山陰線の保津峡駅がある。ほどなく、左岸側から水尾川が合流するが、その上流にはゆずの里水尾がある。トロッコ保津峡駅を過ぎてまもなく、落合で左岸側から清滝川が合流する。この奥に京都随一の標高924mを誇る愛宕山がそびえている。

保津川下りの終点は嵐山である。嵐山は桂川の右岸側にある標高382mの山の名前であるが、むしろその付近一帯をさす地名として知られている。嵐山に近づくと、右岸側に嵐山温泉の温泉宿とその船着き場があり、そのすぐ上方に大悲閣千光寺がある。この寺は、角倉了以が、保津川開削の犠牲者の菩提を弔うため創建したもので、晩年はここに隠棲していた。松尾芭蕉もこの寺を訪れ、「花のやま 二町のぼれば 大悲閣」と吟じてそこからの眺めを絶賛



写真5 以前あった保津川下り模型

した。ここには角倉了以の座像が安置され、その対岸の亀山公園には立像がある。

保津川下りの所要時間は、水量にもよるが、およそ1時間40分である。

## 〔嵯峨・嵐山〕

嵐山の中心スポットは渡月橋である。渡月橋の南側の島は中ノ島と呼ばれ、その南にある渡月小橋を渡ると嵐山のふもとに法輪寺がある。

渡月橋の直下流右岸には、保津川下りの船溜まりがあり、ここで陸揚げされた船はトラックで亀岡へ回送される。

渡月橋の上流には一の井堰があり、その左岸から取水した水路が下流で西高瀬川となる。その取水口のたもとは、珍しい小水力発電設備が設置され、2005年12月、渡月橋がライトアップされた。

渡月橋の西北には小督塚がある。高倉天皇の寵愛を受け、平清盛の怒りを避けて身を潜めた女房・小督の居所といわれている。そのすぐ近くに車折神社の頓宮(仮の宮)があり、その前に琴聴橋という小さな石橋が掛かってい

る。平家物語では高倉天皇の命を受け、小督の居所を探していた源沖国が小督の奏でる琴の音をここで聴き、探し当てたとされている。

その北側一帯は天龍寺の境内である。天龍寺は足利尊氏が開基(建立)し、開山(初代住職)は夢窓疎石(国師号を授かる)である。また、京都五山の第一位とされ、世界遺産にも登録されている。境内には選佛場(法塔)や大方丈(庫裡)、書院がある。また、庫裡の横手からは夢窓国師が作庭の曹源池庭園があり、中央に龍門の滝(枯れ滝)がある(写真6)。平和観音像のわきには愛の泉(霊泉)が出ている。近くには前に多くの羅漢像が並ぶ宝厳院もある。

天龍寺の北側には野宮神社がある。野宮神社は伊勢の神宮に奉仕する内親王が潔斎(心身を清める)のために居住された跡で、源氏物語にも現れ、黒木の鳥居や小柴垣等昔のままの遺風を伝えている。

嵐山一帯の寺院・神社や小径などでは、12月中旬の10日間、夜に花灯路が展開され多くの人で賑わっている(写真7)。

西北にある丸い山は小倉山で、そのふもとに百人一首の編纂や柳の水で知



写真6 曹源池庭園





写真7 花灯路

られる二尊院がある。二尊院の名は、向かって右に発遣（ほっけん：現世から来世へと送り出す）の釈迦如来、左に来迎（西方極楽浄土へ迎え入る）の阿弥陀如来の二如来像による。その前には元禄の俳人で芭蕉の門人の向井去来の遺跡で、西行水のある落柿舎や仏の理想世界「常寂光土」から名付けられ、嵯峨野随一の紅葉の名所常寂光寺がある。



写真8 大覚寺

そこから北に500mほどのところに滝口寺と祇王寺、千灯供養で有名な化野念仏寺、さらに500m奥には多くの羅漢石像のある愛宕念仏寺がある。嵯峨鳥居本の現在の町並みは愛宕神社の門前町として開けたもので、8月16日の夜には、五山の送り火のひとつとして、曼陀羅山の中腹に鳥居形の灯がともる。

ここから約700m南東には清凉寺（嵯峨釈迦堂）がある。清凉寺は、光源氏のモデルとされる嵯峨天皇の皇子・源融の山荘内に唐から持ち帰った「釈迦如来像」を安置したのが始まりとされている。寺のすぐ横に嵯峨豆腐で有名な店もある。

その約500m北東には旧嵯峨御所で心経の本山・写経の道場として親しまれている大覚寺がある（写真8）。大沢池は大覚寺の東にある広大な溜池である。平安期に営まれた嵯峨天皇の離宮造営にあたって唐の洞庭湖を模して作られ、「庭湖」とも呼ばれる。平安時代から興福寺（奈良）の猿沢池、石山寺（大津）とともに、日本三大名月観賞地として有名である。大沢池には月の出の方向である南東の丘陵斜面にダムを築き、北側の名古曾滝の水が林泉を経て導かれたが、後に滝は涸れ、現在は有栖川から取水している。

大覚寺の西側の道を北へ約1kmいったところに、直指庵がある。現代の駆け込み寺といわれ、女性たちが心の内を書き残したノート「想い出草」は今日では5,000冊以上に上っている。

大沢の池からさらに東方約700mの



写真9 車折神社

ところには広沢の池があり、そこから南に約1kmのところに車折神社がある（写真9）。社名の由来は、後醍醐天皇が嵐山の大堰川に御遊幸の砌、牛車が社前で石に当たって動かなくなり、勢いよく引いたところ、引き棒が折れたことによる。本殿前には大小の奉納石が積み上げられている。これは、祈念神石といい社務所にて授かり、神前で願い事を心中にて強く念じ、願い事が叶えば、自宅や海・川・山などで石を拾い、洗い清め、お礼の言葉を記して返納する習わしによるものである。境内末社の芸能神社は、芸能人の信仰も厚く、周りの朱色の玉垣には芸能人の名前が連なっている（写真10）。また、水神社が1473（文明5）年よりこの境内に祀られている。これは、このあたりから松尾にかけての桂川左岸堤が霖原堤と呼ばれ、暴れ川であった大堰川をこの里に住んでいた秦氏がこの川の周辺に神々を祀って治水を祈ったことによっている。桂川が大堰川と呼ばれるようになったのは、5世紀後半に秦氏がこの付近に大きな堤を築いたことによる。

### 〔下流部〕

梅津の対岸（西側）には松尾大社がある（写真11）。松尾大社は賀茂神社と並び京都最古の神社といわれ、醸造の神様として、全国の酒造家などから信仰を集めている。これは、733年に社殿背後より泉（亀の井）が湧き出た



写真10 芸能神社・水神社



写真11 松尾大社



写真12 桂垣

とき、『この水で酒を醸すとき福が招来し家業繁栄する』との松尾の神の御宣託があったことに由来しているという。また境内には霊亀の滝もある。

穢れを除くという解穢の水や神功皇后がこの石を撫でて安産したと言われる「月延の石」で知られる月読神社は松尾大社の境外摂社である。

松尾大社の約1km南方には、華嚴寺(鈴虫寺)と西芳寺(苔寺)、池大雅美術館が並んでいる。鈴虫寺は四季を通じて鈴虫の音色を聞けることからそう呼ばれており、ここにはひとつだけ願いを叶えて来てくださるわらじを履いた「幸福地藏」様がある。

松尾橋から約1.5km下流には国道9号線の西大橋がかかり、この右岸一帯は桂川の名の由来である桂地区である。桂離宮は約7haの離宮で、江戸時代初期の造営当初の庭園と建築物を遺しており、当時の王朝文化の粋を今に伝えている。回遊式の庭園は日本庭園の傑作とされる。周りには生きた竹を寄せて編んだ桂垣(笹垣)が桂川の堤防に面して設置されている(写真12)。これ



写真13 徳大寺樋門の遺構



写真14 淀城跡

は、桂川の氾濫に対して流勢を緩和し、庭園への土砂流入を防止する機能を持っている。そのすぐ前には徳大寺樋門の遺構がある(写真13)。

桂川をさらに下った左岸側に鳥羽水環境保全センター(下水処理場)がある。この施設は京都市最大の規模であり、全国でも有数の処理能力を有し、高度処理の導入にも努めている。春には、120mの藤棚の回廊とともに施設の一般公開を行っている。

この下流、羽束師橋の手前で、鴨川が桂川に合流する。羽束師橋の左岸側は横大路草津町と呼ばれ、以前、草津湊があった。草津湊は江戸時代、京に舟運で運ばれる物資の荷揚げや旅人で賑わった。橋のたもとには魚市場遺跡碑文がある。2010年、横大路桂川・草津みなとフェスティバル(草津みなと鯉海道祭り)が開催され、こま札が立てられた。

桂川をさらに下ると、京都競馬場があることで有名な納所・淀地区である。京阪電車淀駅のすぐ近くに淀城跡がある(写真14)。與杼神社は淀の産土神で、

淀神社と記されることがあるが、正しくは與杼神社(与杼神社)である。淀川瀬水車旧址や唐人雁木跡、淀小橋旧跡など史跡も数多い。

### 3. 桂川的环境

図1は、桂川中・下流部の3つの地点(大堰橋、渡月橋、宮前橋)でのBODの経年変化を示したものである。これによると、下流部(宮前橋)でのBODは昭和40年代には上・中流部に比べて著しく高かったが、その後の改善が著しく、最近では中流部の大堰橋とほぼ同じレベルになっている。一方、CODやT-N(総窒素)、T-P(総リン)は経年的に低下しているものの、まだかなり高い。

NO<sub>3</sub>-N(硝酸態窒素)は横ばいか上昇傾向にあるが、これは、下水処理場での硝化(アンモニア態窒素から硝酸態窒素への変化)技術の適用結果と考えられる。

渡月橋においては、1970年代にはBODが若干上昇していたが、最近では1mg/Lを下回るようになっている。中流部の大堰橋と渡月橋のBODを比べる

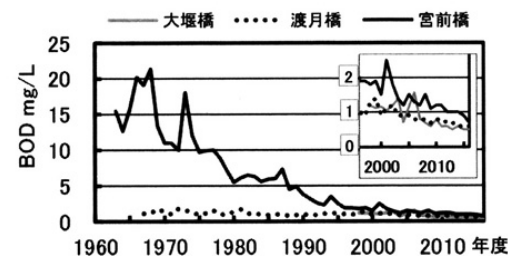


図1 桂川中・下流部のBOD経年変化



写真15 アユモドキ

と、渡月橋の方が値が低くなっているのは、清滝川など比較的きれいな支流の合流と、保津峡における自然浄化作用によるものと考えられる。

桂川の中流部にはアユモドキ(写真15)をはじめ、多様な生態系が残っており、その保全活動が注目されている。近年では、下流部においても、水質に加えて生態系の保全や親水性の創出など、川らしい川づくりへの要望が高まりつつある。

(澤井健二)

#### 参考文献

近畿農政局, 21世紀に残したい近畿の農業利用施設。  
[http://www.kkr.mlit.go.jp/water/06/mizuwo\\_torusisetsu.html](http://www.kkr.mlit.go.jp/water/06/mizuwo_torusisetsu.html)  
 高橋 裕編(2009)川の百科事典, 810pp., 丸善, 東京。



# 洛西・乙訓の川

【らくさい・おとくにのかわ】



## 1. 地理・地勢

乙訓は、西山山地と桂川に挟まれた地域で、落つる土地という、西の山地から丘陵、そして平地という傾斜を持つ地域の呼び名から呼ばれていたと考えられている。山地・丘陵は頁岩、粘板岩等からなる古生層、丘陵地は大阪層群、段丘部は礫層、低地は泥質堆積物からなる沖積層で構成されている。

乙訓西部は、小畑川、善峰川や小泉川などの山地からの流下による河岸段丘が発達しており、農地に不適な地域には乙訓で有名な竹林が繁茂している。長岡京の宮殿が築かれた向日丘陵より東は、桂川の氾濫原が占め、旧分流が点在しており、寺戸川もその一つと考えられている。そのため、この地域は水害に悩まされてきた。

一方、5世紀末に築造された葛野大堰をはじめ複数の堰を設け、桂川から寺戸川、西羽東師川など網の目のように用水路をめぐらせ、水田が広く作られていた。弥生・古墳時代からの集落や

古墳の遺跡が多く存在している。

## 2. 歴史・文化

西羽東師川は、桂離宮の近くの上桂を起点とする寺戸川を、農耕の神を祀る倉掛神社付近で引継ぎ、全長3.8kmで桂川まで流下する。桂川右岸の農耕地の用水路として整備されてきたが、低地を低勾配で流下するため桂川の背水の影響を受け、しばしば洪水が引き起こされてきた。そのため、河道の拡幅が行われるとともに、「いろは呑龍トンネル」と名付けられた20万t規模の地下貯留施設の整備が進行している。その越流施設が寺戸川で見ることができ

る。下流に、羽東師神社がある。その神官古川氏によって江戸時代に開削された12kmの人工水路が羽東師川と命名され、一部が七間堀川や西羽東師川となっている。七間堀川は、全長2.1kmで西羽東師川下流付近を起点とし、17,000



写真1 小畑川中央公園

枚のモジュールを使用した太陽光発電所、京都府洛西浄化センターのそばを通り桂川に流入する。

小畑川は、老ノ坂から全長約16kmで淀城跡の対岸付近の桂川に合流する。かつては下河原付近から東南方向に乱流していたが、南方向へ流れるよう付替えが行われた。また、洛西ニュータウン開発時に、流路を直線状にするとともに、落差工や自然に配慮した改良が実施され、中心部に、小畑川中央公園が整備されている(写真1)。その左岸に、約110種類の竹類を観賞できる京都市洛西竹林公園、全長約45m、高さ8mの6世紀の前方後円墳物集女車塚古墳や中世の物集女城址がある。右岸に西山大原野からの小河川を集めた約12km<sup>2</sup>の流域面積を持つ善峰川と合流する。その地域には、藤原氏にゆかりの深い春日大社の分社である大原野神社、西行桜があることから花の寺で知られる勝持寺、天然記念物指定の遊龍の松がある善峰寺等がある。

中流左岸に大極殿、内裏などの長岡宮の跡、伝奈良時代創建の向日神社や長岡京の復元模型と遺跡からの出土品が展示されている向日市文化資料館がある。西国街道を横切る一文橋は、洪水のたびに流されるため、架設費として通行人から一文を徴収したことから名づけられた。対岸には、多くの古代寺院が廃寺となった中で存続し続けた、この地方で最も古い、ボタンで有名な乙訓寺がある(写真2)。

さらに下流に、菅原道真が大宰府へ



写真2 乙訓寺

左遷される時に立ち寄り木像を祀ったのが始まりとされる長岡天満宮、乙訓地方最大の方後円墳の恵解山古墳、そして、長岡京解明に生涯を捧げた中山修一氏の記念館がある。

## 3. 水質・環境

乙訓地域を流れる河川は、1960年代に急激な宅地開発から水質の悪化が進み、桂川合流前の環境基準点でBODが小畑川で47mg/L、小泉川で88mg/L、西羽東師川で23mg/Lとそれぞれ最高を記録した。下水道の整備、環境保全活動により、現在では、年平均値として小畑川で0.6mg/L、小泉川で0.5mg/L、西羽東師川で0.7mg/Lと改善されてきている。河川整備においても、貴重な文化財や優れた景観など、水辺空間の保全に配慮したものとなってきている。

(田口 寛)

### 参考文献

京都府(2012)淀川水系桂川下流域圏河川整備計画。  
竹村俊則(1963)新選京都名所図繪巻5。  
長岡京市(1997)長岡京市史。  
向日市(1983)向日市史。  
向日市立文化資料館(2017)未完「乙訓郡誌」。

## 12 常照皇寺と山国隊

桂川・由良川源流〔海老瀬〕

京都市右京区京北の常照皇寺は、光厳上皇が1362年に無住の成就寺を改めて開創した寺で、室町時代北朝初代の光厳天皇山国陵、後花園天皇後山国陵、後土御門天皇分骨所が存在する。

戦国時代の衰退後、江戸時代は寺領50石、末寺7か寺の規模を誇った。山国庄は、平安朝建設の古くから大堰川で材木を供給し、太閤検地まで皇室直轄の荘園として献上物が京に上った。

この縁で、王政復古の募兵で自弁の農兵隊として出陣し、第1陣は中山道の甲州勝沼や東山道の野州安塚、上野の彰義隊との戦の後、仙台城を経て帰郷した。第2陣は御所警護の御親兵

となった。その山国隊士の死者を祀る招魂場が山国護国神社で、京の時代祭の維新勤王鼓笛隊として、先頭を行進する山国隊となった。



時代祭の維新勤王隊列

## 13 桂川の筏

保津川・桂川〔澤井〕

桂川では、往時、上流の京北から下流の嵯峨まで、いくつかの区間に分けて筏が流され、丹波材が京都あるいは奈良、大阪へ供給された。その歴史は白鳳時代(645~710)にまで遡る。平安京造営に際しては、山国庄が御料地に指定されている。中世には筏流しを専門とする筏士



筏流し

も登場し、大坂城や伏見城の築城に貢献するとともに、宇津・世木・田原・保津・

山本の各村の筏士に豊臣秀吉から朱印状が付与されている。

江戸時代には商品経済の発展とともに、山方・筏問屋・筏士との関係に対立も見られるようになった。明治から昭和にかけては、建設ラッシュに伴う材木輸送の発展が見られ、大正末期には年間3,000乗、約90万本もの材木が運ばれた。その後、山陰本線の開通、トラック輸送の発展によって、筏流しは減少し、1951年の世木ダムの完成をもって京北地域からの筏流しが途絶え、さらに1950年代後半に保津峡内での筏流しも途絶えた。

## 14 岩倉峡狭窄部と上野遊水地事業

木津川上流〔山本〕

木津川上流部は、伊賀盆地出口の岩倉峡がボトルネックとなっており、古来より水害に悩まされてきた。とりわけ、1854(安政元)年の地震で、伊賀市街地北部が沈下し、岩倉峡への水はけが悪くなったため、大雨が降れば水害の被害が発生するという状況となった。

被害を防ぐためには、岩倉峡を開削して下流へ流れる水量を増加させることが考えられるが、これによる下流の堤防のかさ上げ工事等の工事費が膨大なものとなるため、名張川などにダムを建設するとともに、岩倉峡の手前に遊水地を設置して、増水した河川水を一時、遊水地に貯

留し、水位が低下した時に放流することが上野遊水地事業として計画された。

本事業では、図のように、新居(にい)、小田(おた)、長田(ながた)、木興(きこ)の四つの遊水地が、1969年から建設が始まり、2015年6月に運用が開始された。



上野遊水地事業

## 15 室生寺

名張川〔奥野・和田〕

国道165号線を宇陀川に沿って遡り、室生口交差点を県道28号線に入り約5km登ると室生寺に出る。室生寺は宇陀川に流入する室生川に面している。この寺は真言宗室生派の総本山であり、高野山の真言宗総本山・金剛峰寺は女人禁制であるが、室生寺は古くから女人の参拝が許され女人高野と呼ばれていた。

続日本記には、興福寺の僧(賢環)が桓武天皇の病氣快癒を祈願して建立したと記載されているが、小角行者(役行者)が680年に草創したとも伝わっている。境内には、国宝の金堂や五重塔があり、国宝の釈迦如来立像や十一面観

音立像の他に多くの重要文化財が拝観できる。五重塔は法隆寺の五重塔に次ぐ古さである。

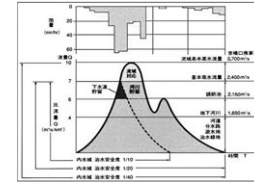


室生寺五重塔

## 16 寝屋川の治水

寝屋川〔澤井・土永〕

寝屋川流域の災害と言えば、1972年の大東水害が有名である。この水害では、被害を受けた住民が、被害の原因は1級河川谷田川の治水に瑕疵があったためであるとして、国、大阪府、大東市を被告として提訴した。



寝屋川流域総合治水の流量配分(大阪府HPより)

訴訟は最高裁判所で争われ、1984年に最高裁判所は同種・同規模の河川の一般的水準及び社会的

通念に照らして安全性を備えていると認められているかどうかを判断基準として、改修計画が進んでいない河川については、その計画に不合理な点がなく、後に変更すべき特段の事情が発生しない限り、未改修の部分で水害が発生しても、河川管理者たる国には損害を賠償する責任はないと判決した。

この水害後、大阪府では総合治水計画を策定し、河道改修、放流施設、貯留施設など、ハード面からの整備を進めるとともに、保水・遊水機能の保全対策、水害に強い街づくりなど、ソフト面からの対策を合わせて進めている。

## 17 生駒山西麓の水車

恩智川・生駒の川〔土永〕

生駒山の西麓で、溪流の豊富な水の水力を利用した水車産業が興った。水車産業は江戸時代から起こり、明治~大正期には137台、1943年頃でも70台近かったが、1983年に姿を消した。この地域に水車が栄えた背景には山地面積が大きく流量が安定していたこと、落差を利用した「上掛け水車」を利用できたこと、この地域が江戸時代から大和と摂津(大阪)を結ぶ交通(船運)の要衝として栄えた地域であったこと、主たる需給地である大阪に近く輸送の便が良かったことなどが挙げられる。

製品は菜種、綿実、精米、漢方薬の粉末、伸

線など多種に及んでいる。このうち日下谷、辻子谷、額田谷では和漢生薬の薬種細末や粉末加工が主であり、1943年においても58台あったと言われている。電力の動力の普及に従って水車が減少する中で動力の熟を嫌う粉末加工が主の辻子谷の水車は1960年代まで残った。一方豊浦谷の水車は伸線業と呼ばれる針金製造が主であったが大正末期にはほとんど電力に替わってなくなっていった。



辻子谷の有志により復元された水車